

## 「平和の俳句 14」

2016年02月01日

「東京新聞」の「平和の俳句」の1月に掲載された句から、子どもたちが詠んだ句を紹介したい。子どもの句は真っ直ぐで清々しい。「いつまでもわらっていてねちきゅうさん 萩原大樹 (8)」<金子兜太 地球に呼びかける小学二年生(八歳)。地球から笑いが消えるのではないか、と心配しているのだ。平和な地球を願う大樹君。> 宇宙から地球を見たら、どのように見えるであろうか。毎日のように、テロによる死者が出ている。有志連合国による空爆も止まることがない。無辜の市民が一瞬にして命を奪われている。彼らは皆、自分の人生があり、夢があり、家族がいる。無念さはいかばかりであろうか。戦闘を逃れて難民とならざるを得ない人々の不安と恐怖はどれほどのものでしょうか。神は創造した天と地とそこにある全てを「良し」とされた。萩原君が詠んでいるように「笑っている地球」を、「良し」とされた世界を求め続けることが人間である証である。

「ごめんねの言葉に平和つまってる 大野睦樹 (16)」<いとうせいこう 高校一年生の一句。謝らないことの積み重ねに傲慢(ごうまん)もかたくなさも強まり、考えを変える勇氣は日ごとになくなっていく。そして戦争が。> 私は旧満州、大連で生まれた。自分のことを中国侵略者の末裔だと思っている。他国に軍隊を進駐させた時、それは既に侵略である。軍隊に守られて日本人街で育った者は侵略者の末裔と言わざるを得ない。日本基督教団は「戦争責任告白」を公にした。皇国史観を奉じ、戦争に協力し加害者になった過ちと罪を悔い、世界に、殊にアジア諸国に許しを請うた。ドイツのヴァイツゼッカー大統領は「荒れ野の40年」という演説で、ナチズムの犯した罪を列挙し、「過去に対して目を閉じる者は、現在に対しても目を閉じるのであります」と語った。過ちを率直に認め、謝罪するところに和解が生まれ、平和が実現する。大野君は「ごめんねの言葉に」、謝りの言葉に共にある平和があることを熟知している。

「武器を捨て言葉を使い話し合え 佐々木俊平 (14)」<金子兜太 作者は十四歳。若者がこの意見を端的に言い切ったことがうれしかった。憲法九条もこれを望んでいるのだ。平和に道多し。> 言葉を使って話し合うことを忘れ、武力に物を言わせようとする政治家たちに 14歳の佐々木君の句を教えてやりたい。強くて大きくて豊かなものを至上と見なす価値観が戦争を生み出す。弱くて小さくて貧しいものの中に、人間の真実があることを知るべきではないか。主イエスは飼い葉桶で生まれ、敗北の極みである十字架のどん底で死なれた。神は見捨てられた所に現臨されるという秘儀である。

「青空の下でわたしはただひとり 武藤伊呂波 (12)」<いとうせいこう これを「平和の俳句」として読むと不思議な感慨がある。一人の「わたし」の爽快さが、その取り換えようのない尊さが、平和。> 名前が「伊呂波」(いろは)さんとは面白い。名付けたご両親は個性的な方なのであろう。子どもの頃、山本有三の『路傍の石』を読んだ。主人公の少年「吾一」は道端の石であるが、「吾は一人」、かけがえのない人間であることに目覚め、時流に流されない人物に成長していく。青空の下に一人立つ伊呂波さんも自分をしっかり持って生きていくであろう。

赤ちゃんに関する1句。「赤ちゃんがまじめにおならする平和 磯谷佳世子 (83)」<金子兜太 この男の赤ちゃんは、いま三十二歳。昔は真面目におならをしていたのです。><いとうせいこう あけましておめでとうございます。まさにおめでたい生命の息吹の平和。> 光景が目には浮かぶ。息子が赤ちゃんの時、おならをして、大笑いしたことを思い出した。赤ちゃんが真面目におならして、笑い合う平和を失ってはならない。